

理学部は今

No.54 July 2024



課題研究発表会（自然環境科学プログラム）



沢に行く、たくましい背中（地質調査法実習III）



インドで国際的なフィールドワークに挑戦
（S-EARTHプログラム）



5年ぶりに開催された新入生歓迎会（生物学プログラム）

CONTENTS

■学部長メッセージ……………	2	■研究紹介……………	8
■令和6年度入学者数……………	2	■プログラムニュース……………	10
■理学部後援会の事業報告と事業計画…	3	■退任教員紹介……………	12
■進路内定状況と就職活動支援について…	3	■新任教員挨拶……………	15
■令和5年度卒業生進路状況……………	4	■科学人材育成事業について……………	16
■卒業生からのメッセージ……………	4	■教員の受賞・表彰……………	16
■在学生の声……………	7	■これからの行事予定……………	16

理学部のホームページ <https://www.sc.niigata-u.ac.jp>

発行／新潟大学理学部広報委員会・理学部後援会

真理の探究と科学の知恵

理学部長 大鳥 範和



WHOによる新型コロナの緊急事態の終了宣言から1年、2020年4月の新生はこの3月に卒業し、約半数は大学院に進学しています。入学時の最も過酷な環境を経て学位の取得に至った皆さんの努力を称えたいと思います。卒業式後の祝賀会では、5年ぶりの祝杯を挙げて新たな門出を寿ぎました。

本学は今年、創立75周年を迎えています。理学部でもいくつかのプログラムで同窓会と連携した催しを予定しています。また、9月26日から3日間、数学と理科の全分野を対象とする国際会議（ICNS2024）を理学部で開催します。昨年この欄で紹介した、理学部主体の「大学の世界展開力強化事業」と併せて、理学部の国際化に貢献することを期待しています。また、理学部の社会連携・貢献の柱である次世代の科学人材育成事業の取り組みとして、科学技術振興機構（JST）の補助による小中学生を対象とした「新潟ジュニアドクター育成塾」が3月に終了したことを受け、今年度から新たに中学生と高校生を対象とする育成計画をそれぞれ個別に始めました。前者は中谷医工計測技術振興財団、後者はJSTによる補助をそれぞれ受けており、ともに5年間の計画です。

来年1月の共通テストから、理学部でも試験科目に「情報」が課されます。近年、情報教育が重要視される傾向が強まっていますが、リテラシー

や活用能力の開発がその中心です。情報の真偽を見極めることも大切とされていますが、判断できることが前提のようです。入試はもちろん大学での期末試験も多くは真偽の判然とする問題で構成されているので当然とも言えます。一方で、大学初年次の物理学などの学生実験では、測定値に対する真の値は知ることができないとする考え方が示され、釈然としなかった方も多いのではないのでしょうか。真の値が不明なら、つまるところ真理も不明ではないかと。しかしながら、測定値と真の値をそれぞれ事実と真実に置き換えてみると、すべての事実は真と偽の間にあり、真の値が不明とすることは科学の経験的な知恵のひとつと言えます。自然科学の観測・観察結果やその解釈に限らず、歴史の記録や公的文書などすべての情報は誤りを含む可能性があるとし、それを大前提とすることから探究の余地が生まれ、より正確に本質・真実・真理に迫ることができるのではないのでしょうか。理学部での知の探究が100周年の先も見据えてますます発展し、科学に対する信頼性の向上に寄与することを期待しています。

令和6年度入学者数

令和6年度入学者数	新入学	理 学 科							計
		数学プログラム	物理学プログラム	化学プログラム	生物学プログラム	地質科学プログラム	自然環境科学プログラム	フィールド科学 人材育成プログラム	208
令和6年度入学者数	3年次編入学	3	2	2	1	2	-	1	11

注) 令和6年4月1日現在の状況です。

理学部後援会の事業報告と事業計画

令和5年度 理学部後援会事業報告

- 1 定期総会の開催
書面審議（令和5年6月）による開催
- 2 各種事業
 - (1) 学部教育事業の援助
 - ① 学生研修、実験・実習への援助
 - ② 大学祭に対する援助
 - (2) 卒業祝賀会の援助
卒業祝賀会（学位記交付式）の開催
令和6年3月25日（月）ANAクラウンプラザホテル新潟
 - (3) その他
「理学部は今 第53号」令和5年7月発行

令和6年度 理学部後援会事業計画

- 1 定期総会の開催
書面審議による開催予定
- 2 各種事業
 - (1) 学生の課外活動及び福利厚生への援助
 - ① 大学祭に対する援助
 - ② 学生用設備充実への援助
 - (2) 学部教育事業の援助
 - ① 学生研修、実験・実習への援助
 - ② インターンシップ等への援助
 - (3) 卒業祝賀会の援助
卒業式当日に卒業祝賀会を開催予定
令和7年3月24日（月）ANAクラウンプラザホテル新潟
（参加者：卒業生、保護者、後援会役員、同窓会役員、教職員）
 - (4) その他
広報活動として「理学部は今 第54号」令和6年7月発行予定

進路内定状況と就職活動支援について

昨年度の卒業生進路状況は次ページの表「令和5年度卒業生の進路状況」の通りです。理学部卒業生は、半数強が大学院に進学し、半数弱が会社員や公務員・教員として就職しました。内訳など詳細は理学部HP内の「進路情報」_「卒業生の進路」にも掲載しています（<https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/guid/gen.html>）。就職率は、下表「理学部就職率」の通り昨年度も100%でした。

理学部では、学生が社会人としての目標を立て、必要な能力を身に付けるための教育（キャリア教育）にも力を入れています。（詳細：理学部HP「進路情報」_「キャリア教育」https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/edu/career_education.html）例えば、理学部卒業生の採用実績をもつ県内企業や官公庁研究機関が参加した理学部キャリアアフォーラムを組織し、様々な学生向けのキャリア教育関連イベントを開催しています。前記のHPに、開催予定イベントと過去イベントの内容を掲載していますのでご参照下さい。今年度はイベントの一部を、対面で実施する予定です。各イベントには質問の時間が設けてあり、人事担当者などに直接質問ができますので、企業や官公庁研究所などへの理解を深める場としてたいへん有益です。

10月に開催予定の『就職・就活ガイダンス』では就活支援企業や本学キャリアセンター職員による講演を、『進学・進路ガイダンス』では大学院生と教員から進学に関する解説を聴くことができます。また、年に8回開催の『理学部コロキウム』があり、6回は理学部教員が行っている最先端の研究を教員自らが紹介

する講演を、夏と冬の2回は企業等で活躍している理学部出身者の講演を予定しています。研究者の講演を聴くことで、「研究する人生」の実態を知ることができます。（詳細：理学部HP「研究活動」_「理学部コロキウム」<https://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/res/next-colloq.html>）。

理学部開設の授業として、就業体験ができる『インターンシップ特別実習』や、企業などの研究者・技術者による実践的講義である『科学・技術と社会』および『新素材の物性』などがあります。理学部で学ぶ学問の基盤に加えて、これらの科目を受講することで実践的な知識や経験を積むことができます。

学部開設授業科目以外の各種イベントは、理学系の大学院生も対象としています。なお大学院生へのキャリア形成支援は、新潟大学PhDリクルート室のHPもご参照下さい。（<https://www.phd.niigata-u.ac.jp/about/>）。大学院生には、特に研究者としてキャリアを積むための様々な技能の獲得についても支援が行われています。このように研究者養成も理学部の大切な役割です。

自然現象の記述と理解を目指す理学の教育を基盤としながら、社会実践的な教育研究にも注力することで、学生が将来社会で果たす役割について深く考える機会を作っています。以上のようなキャリア教育を通じて、学部卒で就職する場合、修士号や博士号を取得して就職する場合のそれぞれについてキャリアパスを構築できるように、今後も様々な支援を続けていきます。

（理学部就職・進路指導委員会委員長 長束 俊治）

	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
就職率	98.9%	98.8%	98.8%	100.0%	100.0%	100.0%
就職内定者／ 就職希望者	87名/88名	85名/86名	84名/85名	93名/93名	85名/85名	78名/78名

理学部就職率



令和5年度卒業生進路状況

学部	数学プログラム (数学科)	物理学プログラム (物理学科)	化学プログラム (化学科)	生物学プログラム (生物学科)	地質科学 プログラム (地質学科)	自然環境 科学プログラム (自然環境科学科)	フィールド 科学人材育成 プログラム	理学部
進学	17	27	23	18	9	10	5	109
教員(含む非常勤)	3	2	1	1	0	1	1	9
公務員	3	1	2	4	0	4	3	17
民間 企業	食品・飼料	0	0	1	1	0	0	2
	繊維・化学・石油	0	0	1	1	0	0	2
	電力・ガス	1	0	0	0	0	1	2
	製薬・医療	0	0	0	0	0	0	0
	建設・建設材料	1	1	1	1	1	4	9
	金属・機械	1	0	0	0	0	0	1
	電気・精密機械	2	3	1	0	0	0	6
	情報・通信	8	1	0	1	0	1	13
	印刷・出版	0	0	0	0	0	0	0
	商業・サービス	2	3	0	1	1	1	9
	金融・保険	1	1	0	0	0	0	2
	教育学習支援	0	0	0	0	0	1	1
	運輸・その他	1	0	2	1	1	0	5
その他	3	0	1	2	4	1	1	12
合計	43	39	33	31	16	24	13	199



卒業生からのメッセージ

学生生活を振り返って

数学プログラム 粕谷 玲央

新型コロナとともに始まった4年間の大学生活も、いよいよ終わりを迎えました。はじめの2年間は遠隔授業を受ける日々が続く、「何のために大学に入学したのか」と思うこともありましたが、無事卒業の瞬間を迎えることができ、とても嬉しく思います。また、これまで指導してくださった教職員のみなさんや大学生活を通して出会うことのできたみなさん、そして、地元山形を離れる選択をした自分を最後まで応援してくれた家族には、感謝の気持ちでいっぱいです。

入学前の期待とは裏腹に、困難の多い大学生活でした。「数学が好きだから」という短絡的な考えで数学の世界に飛び込み、打ちのめされる日々が続きました。何度考えてもさっぱりわからず、数学をやめてしまいたいと思ったこともたくさんありました。しかし、指導教員である大井先生や同期に恵まれ、自分とは異なる知見や、数学を通じたたくさんの出会いを得ることができました。これは私の一生の宝物です。

サークルやアルバイト、就職活動など、たくさんの思い出はここでは書ききれません。あっという間で、学びの多い4年間でした。

春からは公務員として、大好きな地元東北のために働きます。4年間の思い出を胸に、社会人として頑張りたいと思います。最後に、これまで関わってくださったすべての方々へ本当にありがとうございました。



大井先生、友人とともに(右から2人目が粕谷さん)

卒業にあたって

物理学プログラム 田中 新太

山梨から新潟にきて早4年、ようやくお天道様に恵まれない気候にも慣れてきました。入学したときからコロナ禍で、3年生になるまで授業はほとんどオンライン、大学に行くことのない生活が続きました。これに私の怠惰な性格が重なり、2年生では単位をたくさん落としてしまいました。

しかし3年生で対面授業が始まると、演習や実験など他の学生と交流する機会が増えました。仲間と協力して問題解決に取り組むことはとても面白く、大学生活に楽しさを見いだせたように感じます。また、物理の楽しさにも改めて気づくことができました。

4年生になり、興味があった宇宙物理学研究室に配属されました。ゼミでは自分の基礎力のなさを痛感しましたが、わからないところを手の届く範囲でひとつずつ埋めていきました。卒業研究では恒星という具体的な物理現象に関して、今まで学んできた様々な物理が体系的につながっているのが分かり、自分の4年間

の成長を感じられました。

また、地元の友達との旅行やスポーツ観戦などの思い出も強く心に残っています。距離が離れても大切にしたい友人らの存在に気づくことができました。これは私のこれからの人生の中で、大きな財産になると思います。

卒業後は大学院に進みます。後悔のないよう、いろんなことに挑戦していきたいです。最後に、この4年間、様々な面で支えてくれた家族には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。



貴重な4年間

化学プログラム 小中 怜奈

コロナ禍真っ只中に始まった学部生生活も、気付けば終わりを迎えようとしています。新しい友達を作る機会も少なく、黙々と1人で課題をこなしていた日々が懐かしいです。化学を学びたいと期待を抱いて入学したものの、オンライン授業の中でモチベーションを保つのに必死だった1年次は大変だった記憶が残っています。コロナ禍で唯一の人と関わる場と、社会人として必要な経験を積む機会をくださったアルバイト先の方々へ、感謝を伝えたいです。

今では気兼ねなく話せる友達や研究室のメンバーと出会うことができ、楽しい学生生活を送ることができています。もちろん楽しいことだけではなく悩むことも多くありました。仲間と励まし合ったり先生に相談したりして課題に挑戦していく毎日の中で、計画性と忍耐力の大切さを身に染みて感じています。答えのない問題を考えることに苦手意識のあった私にとってはとても濃く、

大切な1年となりました。

来年度の春からは新潟大学大学院に進学します。学部生の4年間で得たことを活かし、自身の研究活動により一層励みたいと考えています。

最後に、学部生の4年間を支えてくださった家族や友人、研究室のメンバーに心から感謝申し上げます。



大学生活を振り返って

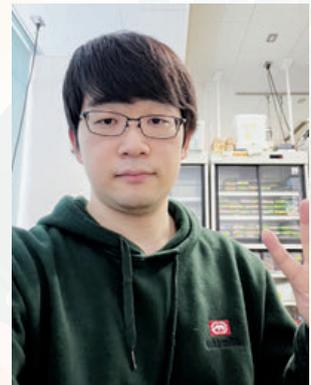
生物学プログラム 吉田 悠人

私達の学年は、新型コロナウイルスの影響で、入学してからの2年間を、ほとんど大学に通わずに過ごしました。理学部に知りあいはおらず、履修登録の時にどの授業をとればいいのか不安だったし、家でオンラインやオンデマンド配信の授業を受けるばかりだったので、大学生になったという実感はあまりありませんでした。2年生になって、同じサークルに所属していた友人と仲良くなり、生物学の実験も増えたことでやっと他の人と話す機会が増えたかなという感じです。

そして、いざ4年生の課題研究が始まってからは、実験をしても思い通りの結果が出ないことに一喜一憂したり、データをまとめて考察するうえで必要な知識が全く身につけていなかったり、複数の実験をしているうちに一部の実験が中途半端になったり、データをまとめるのが遅くなってしまったりと、研究活動を進めるうえで反省点が多かったなと思っています。

また、大学院入試の前や課題研究発表に向けての追い込みの時期では、忙しさと不安とで気分が下向きになることも多かったのですが、その時には友人が何度も話を聞いてくれました。そのおかげで投げやりにならずになんとか乗り越えることができたのだと感じていますし、自分も忙しいだろうに相談に乗ってくれた友人達にはとても感謝をしています。

大学院を修了した時に、自分は確かに成長したのだと胸を張って言えるよう、努力を重ねてゆきたいと思います。



卒業生からのメッセージ

山あり谷あり

地質科学プログラム 工藤 なくる

新潟大学理学部へは、地元であり、研究したかった古生物学が学べるという理由で入学しました。4年間を通じて、とても素晴らしい経験ができたと感じています。

大学の講義は、高校とは異なり、より専門的な知識と論理的思考力を養うことができました。特に地質学の分野では、小さな砂粒から過去の地球の姿を復元する過程に感動を覚えました。1～2年次は、講義や実習を通して地質学・古生物学の魅力を学び、将来の研究活動への意欲が高まりました。

しかし、3年次の野外実習では調査がうまく行かず、自分が研究に向いていないのではないかと焦りと不安に襲われたこともありました。そんな時、先生方や友人が励ましてくれたおかげで、再び研究に前向きに取り組むことができました。卒業研究では、古代の海に生息していた三葉虫を扱い、形態や生態に関する研究を行いました。大学

院進学後は、この研究をさらに発展させていきたいと思っています。

新潟大学で学んだことを活かし、今後も多くの知識を吸収しながら、古生物学の分野で良い成果を出していきたいです。



4年間を振り返って

自然環境科学プログラム 平野 貴郎

学生生活を振り返ると、懐かしい思い出がいくつも浮かんできます。初めての授業、友達との楽しい時間、そして課題や試験に向けての夜遅くまでの勉強など、さまざまな経験がありました。

学生時代の特に大学2年次までは、コロナによって大学生活が大幅に制限されていました。中でも、新しいことに挑戦し、失敗や困難に直面しながらも、それらを乗り越えることで成長しました。

また、コロナで制限された中でも、さまざまな人々との出会いも学びの一環であり、異なる背景や意見を持つ人々から多くを学ぶことができました。私は運よく、大学1年次から部活動に所属することができ、共に学生生活を頑張る友を得ることができました。

一方で、学業や将来のキャリアに対する不安もありました。将来の方向性や自分の能力についての疑問が頭をよぎることもありましたが、友人や指導教員のサポートによって、前進する勇気を得ることができました。

何よりも、学生生活は楽しい時間でもありました。友人との時間や部活動、イベント参加など、充実した日々を送ることができました。これらの経験は、私の人生において貴重なものであり、今でもその思い出を大切にしています。

学生生活を振り返ると、苦労や喜び、成長や友情など、さまざまな感情が交錯しています。その交錯は私の一部であり、将来に向けての貴重な経験となっています。



対面が持つ意味

フィールド科学人材育成プログラム 工藤 亮

私が新潟大学に入学した2020年、世間では新型コロナウイルスが猛威を奮い始めていました。これにより、授業や部活などの様々な活動がオンラインとなりました。1～3年生の途中までは、家に籠り、リモート授業を受けていることが私にとっての大学生活でした。正直、私はその生活にそれほど苦痛は感じていませんでした。実家暮らしであるのに加え、元タイムドア派である私にその生活がフィットしていたのかもしれませんが、しかし時間が経ち、次第に対面ができるが増えていきました。私にとっての転機は3年生の夏に経験した野外実習でした。この実習は、それまでの生活とは打って変わり、他の履修者と直接会って学ぶ機会となりました。そして、それは私にとって非常に楽しいと思える経験となりました。その時私は、一人で「なんとなく」課題をこなしていくよりも周囲の仲間と「楽しく」学んでいく方が、何倍も何十倍も有意義であるということに気がつきました。現在では

多くの活動制限が緩和され、対面で行えるようになりました。在学生の方やこれからご入学される方は、授業やサークル活動など、一生で今しかできないことを仲間と共に精一杯楽しんでほしいと思います。そして、悔いのない大学生活を送れることを心から願っています。





1年間の振り返りと今後の抱負

2年 笠間 花

新潟大学に入学して早1年が経ちました。入学当初は不安なことも多くありましたが、有り難いことにこの1年で友達にも恵まれ、学生生活にもだいが慣れてきました。また、今年度からはより専門的な授業が増え、教養科目の履修で忙しかった1年次とはまた違った充実感を感じています。

私はフィールド科学人材育成プログラムを希望しており、この夏には実習として佐渡の演習林に行く機会もあります。実習での経験がこれまで得た知識とどう結びついていくのか、今からとても楽しみです。これからの学生生活も、この新鮮な気持ちを忘れずに、勉強に限らず何事にも全力で

取り組んでいきたいと思っています。



大学生活、この1年を振り返り

2年 塩原 美彩

入学してからこの1年を振り返ると、様々なことがありました。私は物理学を学びたいと思い理学部に入学しました。早速、同じ物理学を志す多くの仲間や、勉強において、お互いに刺激を与えあえる友人にも出会うことが出来ました。1年生の頃は自分が目指す専門科目以外にも教養として幅広く知識を身に着けることが求められました。

部活動では弓道部に入り、他学部の先輩や仲間との出会いにも恵まれました。弓道は大学に入ってから始めましたが、そんな仲間との練習や新しいことに挑戦することの楽しさを日々感じています。2年になると、勉強面ではよ

り高度で専門的な知識の定着が求められるようになり、ときどき部活動と勉強との両立が苦しいと感じるときもありますが、そういったことも前向きに受け止めながら日々復習や課題に励んでいます。



かけがえのない学生生活

2年 山崎 大和

私は、数学プログラムに進もうと決めていて、これまで基礎的な知識を身につけるために日々勉強に励んできました。大学数学は高校までとは違い、結果ではなく、そこに至るまでの過程を大切にしているので、私の学びたいことそのものです。2年生になり、少しずつ専門的な内容になってきているので、日々の努力を大切に楽しんでいきます。

また、サークルも全力で取り組んでいます。1つ目のサークルでは、小学校でイベントを行い、子どもたちの自己肯定感を上げる活動をしています。2つ目のサークルでは、ドラム、ギターなどの演奏をしています。

学業、サークル、友人との交流、全てがかけがえのないものです。これからも悔いのないように、卒業式で、最高の学生生活だったと心の底から想えるように、毎日を大切に全力で過ごしていきます。





純良単結晶育成による物性物理の研究

物理学プログラム 助教 廣瀬 雄介



物質は原子から構成され、原子同士の結合の仕方や配列（結晶構造）などによってその物質の性質は大きく異なります。例えば、ダイヤモンドとグラファイトは同じ炭素原子から構成されていますが、結晶構造は異なります。その結果として、見た目の色も硬さも電気伝導性もまるで違います。このような物質の性質を扱う物性物理学が私の専門分野です。この分野の研究には、実際の物質がないと話が始まりませんし、かつ本質的な性質を知るために純良性が求められます。まずは、物質の合成法について紹介し、その物質で繰り広げられる物理についてお話ししたいと思います。

塩やミョウバンを水に溶かして結晶を作ったことはあるでしょうか？私たちは、ビスマスや錫などの低融点の金属を溶媒（フラックス）として原料となる元素を溶かし込んで結晶を育成しており、このような手法をフラックス法と呼びます。図1はフラックス法で作成した単結晶の写真です。数mmから1cm程度の大きさで、それぞれの結晶構造を反映した特徴的な結晶面が現れます。フラックス法は高度な技術を必要としないため、研究室配属したばかりの四年生でも新物質を育成してしまうことがあります。他にも引き上げ法や気相化学輸送法など結晶育成にはさまざまな手段があり、材料の元素などを考慮し、最適なものを選びます。

結晶中では、鉄のように相転移温度である約770℃

以下で強磁性体（磁石）になるなど、物質の相の変化が見られます。磁気的な相転移だけでなく結晶構造の変形などの相転移もあります。これらの相転移は結晶中の電子間の相互作用を起源としており、圧力や磁場などの外部パラメータで制御できます。特に相転移温度を抑制し、絶対零度とした領域を量子臨界点と呼びます。量子臨界点では量子揺らぎの効果によって、これまでの理論的枠組みでは説明できない非従来型の超伝導など不思議な現象が見られます。超伝導は磁場に弱く磁性との相性は悪いと考えられていましたが、磁気的な量子揺らぎが超伝導をアシストするような現象が発見されています。

私たちは、CeやYbという希土類元素を含んだ物質における磁気的な量子臨界点、遷移金属とカルコゲン元素で構成される低次元物質における構造相転移の量子臨界点の研究を単結晶育成から行っています。図2は遷移金属カルコゲナイドの構造相転移を抑制した圧力での電気抵抗の温度変化の図です。抵抗がゼロまで下がり超伝導を見出しました。この結果は、研究室ゼミのZoomに参加しながら、外部施設で実験中に得られたもので、図2はゼミに参加している学生とこの発見の喜びを分かち合うために共有した画面でもあります。これが量子揺らぎを反映した特殊な超伝導かは現在も調査中で、これからの展開が期待されます。

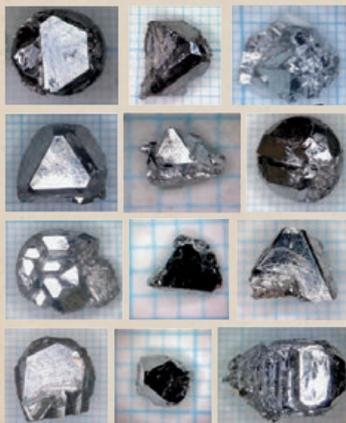


図1 フラックス法で得られた結晶

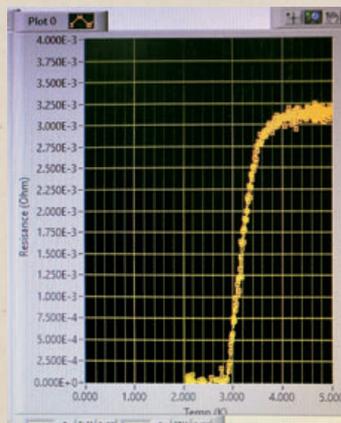


図2 圧力下で見出した超伝導転移

溶液化学の最前線: 次世代電池に資する液体の探求

化学プログラム 助教 韓 智海



SDGsやSociety 5.0の達成に向けて、次世代の蓄電池・キャパシタや電析技術の革新が進んでおり、新規電解液の開発はその中心課題です。

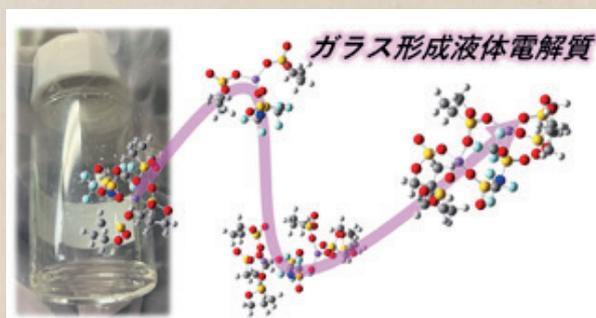
特定の組成において共融点を与える深共融液体は古くから知られており、近年、室温で液体の塩であるイオン液体も注目されてきました。溶媒と当量の金属塩を混合した混合物である新たなイオン液体の溶媒和イオン液体や、塩が十分に溶媒和されない超濃厚電解質溶液では、高速イオン伝導や高いイオン輸率、特異的な電極反応など、従来の希薄溶液にはない現象が見出されています。これらの溶液の特異的な性質により、次世代電気化学デバイス・プロセス電解液として期待されています。電解液では、反応活物質であるリチウムやナトリウム、アルミニウムなどの金属イオンの溶媒和・脱溶媒和反応、イオン対生成反応に加え、イオン伝導性や酸化還元反応特性が電池性能を左右します。これらは全て分子間の相互作用に支配されるため、溶液中の局所構造が鍵となります。

私は、様々な液体の特異的なイオン伝導や電極反応のメカニズムを解明するとともに、更なる機能性を示す電解液の探求に向けて、種々の分光法と電気化学手法を用いて研究を行っております。

最近、私たちの研究グループでは、固体と固体の二成分混合物が室温で液体でありながらガラス転移のみ示す「ガラス形成液体電解質」を見出しました。ガラス転移とは、ある温度以下になると、液体のように分子動きやすい状態から、固体のように分子の動きが制限される状態です。私たちは、この液体と固体の中間状態と言えるガラス形成液体電解質が、高速なリチウムイオン伝導を示すことを発見しました。種々の分光法を用いた実験と分子軌道計算を組み合わせることで、高速なリチウムイオン伝導に寄与する化学種の同定に成功しました。高リチウム塩濃度のガラス形成液体電解質中でリチウムイオンは、陰イオンと直接接触している接触イオン対や、複数の陰イオンと連結している会合体として溶存していることを明らかにしまし

た。この会合体が特異的なリチウムイオン伝導に重要な役割を果たすと考えられます。

一方、リチウム塩以外の塩としてアルミニウム塩を用いた際にも、同様にガラス転移のみ観察されることが分かりました。このように様々な金属塩を用いることも可能であるため、使用目的に応じた機能を有する蓄電デバイスの創成とその学理構築を目指して研究を行っております。また、電極反応が起きる電極と電解液の界面に焦点を当て、電池の充電/放電を行いながら、電解液中における溶存化学種とその構造が電極反応特性に与える影響とその因子についても明らかにしていきたいと考えております。





プログラムニュース

数学プログラム

2023年度は、コロナウイルスも5類感染症に位置付けられ、学生たちが対面&マスク無しで活発に議論を行っている姿が多くみられるようになりました。卒業祝賀会も、コロナ発生前と同様の飲食有りの形態で行われ、学部学生40名、博士前期課程17名、博士後期課程2名が無事に卒業・修了しました。

8月には星明考教授が新潟大学学術出版奨励賞を受賞されました。また、11月には三浦毅教授と橋詰健太助教（2件）が新潟大学優秀論文表彰を受けました。これらは国際的に評価の高い学術図書及び論文の著者に対して与えられるもので、数学プログラムの研究力の高さを表すものとなっています。学生の研究も活発に行われており、12月には博士前期課程2年生の岩本峻汰さんが東北ORセミナー2023；若手研究交流会において学生優秀発表賞を受賞しました。また、2024年3月には博士前期課程2年生の遠藤凌輝さんが新潟大学学生表彰を受けました。

12月5日には数学プログラム講演会が行われ、小林大貴氏（新潟県立糸魚川白嶺高等学校）、石川智一氏（新潟県立新潟江南高等学校）から貴重なお話を伺うことができました。

2024年度になり、関川浩永名誉教授が瑞宝中級章を受章されました。数学プログラムにとっても、大変喜ばしいニュースとなりました。



物理学プログラム

物性物理学実験分野の廣瀬雄介先生が令和6年度内に、新潟大学から転出されることになりました。廣瀬先生は2012年、摂待力生教授の研究室の助教として新潟大学に着任されました。写真の好青年は着任直後の廣瀬先生です。今から12年前のお姿ですが、現在とあまりお変わらないように感じます。廣瀬先生の主な研究対象は超伝導体や磁性体など、現代の科学技術を支える新物質です。これらの物質を研究室で作成し、極低温などの極限状態における性質を解明します。詳しくは廣瀬先生ご自身による研究紹介記事をご覧ください。摂待先生と廣瀬先生の研究室は学生にとっても人気があり、4年次の課題研究の配属調整では毎年、定員を超える希望者が殺到していました。

6月、第22回物理学プログラム・ケルビン祭が対面形式で開催されました。この催し物では毎年、成績が優秀な物理学プログラムの学生の表彰が行われますが、賞状と副賞は物理学教室の同窓生の方々のご支援によるものです。また、今年は5年ぶりに飲食を伴う懇親会（ハーベキュー大会）が開催されましたが、予算の不足分を理学部後援会費

の物理学プログラムへの配分から補わせていただきました。同窓生の皆様、および後援会の皆様に心より感謝申し上げます。



化学プログラム

2023年度夏以降の化学プログラムニュースをお伝えします。8月にはオープンキャンパスが4年ぶりに対面開催されました（webと同時開催）。化学プログラムでは、教員によるプログラム説明会と模擬授業、研究室所属学生による研究ポスター紹介を行いました。予約制の説明会と模擬授業はほぼ全回定員が埋まり、大変盛況でした。写真は学生実験室で行った模擬授業の様子です。2024年度も同様のオープンキャンパスを予定しております。

10月には35名の2年生が化学プログラムに配属されました。例年同様の規模で化学プログラムの全学年がそろいました。

研究面では、化学プログラムが主催・共催する学内外の研究者による発表会が多数行われました。恒例の新大先端化学セミナーの他、医学分野との分野横断的な研究発表会も2回行われました。伝統的な化学はもちろんのこと、医療や工学など他分野との境界領域の研究もますます重要性を増しています。

2月から3月初旬にかけて、博士論文、修士論文、卒業論文の発表会が行われました。3月の卒業式後には4年ぶりに対面で化学プログラム

卒業生謝恩会が行われ、卒業生と教員との交流を楽しみました。今年度の学部卒業生はコロナ禍の影響を最も強く受けた世代になりましたが、最後にこのような機会を持てたことは大変良かったです。

4月からは新年度が始まり、例年どおり教育・研究が行われています。



生物学プログラム

2024年2月7日に理学科生物学プログラムに所属する30名の課題研究発表会を、同8日に博士前期課程基礎生命科学コースに所属する4名の修士論文発表会を行いました。そして3月25日には、生物学プログラムと基礎生命科学コースの学位授与式が開催されました。2023年度の卒業生は、4年もの間コロナ禍の影響を色濃く受けてきた世代ですが、卒業時には賑やかなセレモニーを行うことができました。教職員一同、皆様のご活躍をお祈りしております。

長年に渡り生物学プログラムにおける教育および運営にご尽力頂いた前野貢教授が、2023年度をもって定年を迎えられたため退職されました。前野先生のこれまでのご貢献に心より感謝を申し上げますと共に、今後のご健勝とますますのご活躍をお祈りいたします。

4月1日付で神林千晶助教が着任されました。系統分類学・進化生物学を専門とされている神林先生は「ヒル類の系統分類と進化」と「脊椎動

物間で生じる遺伝子の水平伝播」という大変興味深い研究を展開されています。詳細については生物学プログラムのホームページをご覧ください。



地質科学プログラム

当プログラムの豊島剛志氏と松岡篤氏の2名が、2023年度3月末に定年退職されました。両氏は長年にわたり教育と研究の分野で多大な貢献をされ、学生たちの指導にも力を尽くしてまいりました。彼らの退職に伴い、教育体制にほころびが出ないよう、講義や実習内容の改良に取り組む予定です。

植田勇人准教授は、2022年に宮城県沖の潜水艇調査で東日本大震災の原因となった巨大断層が海底に現れた崖を発見し、その研究成果が昨年末のテレビで報道されました。また、今年3月に松岡篤氏が参加した航海調査では、能登半島沖地震の原因となった断層が発見されました。これらの発見は、震災のメカニズム解明において非常に重要であり、今後の防災対策に大いに貢献することが期待されています。

インド、オーストラリア、スリランカの海外大学と立ち上げたフィールド科学教育プログラムが本格的に始まりました。昨年度は9月にオー

ストラリア、12月にインドへ学生を派遣しました（写真）。今年は、9月に北部インド（ヒマラヤ）、12月にスリランカへ学生とともに訪問する予定です。

今後も、教育と研究の両面で高い成果を追求し、学生たちと共に未来を築くために努力してまいります。豊島氏と松岡氏の退職により、教育体制に一部変更が生じることもありますが、教職員一同、一丸となってさらなる教育の向上に努めてまいりますので、ご理解とご協力をお願い申し上げます。



ケララ州（インド）の伝統料理サディヤ体験

自然環境科学プログラム

自然環境プログラムでは2023年度24名の卒業生を送り出しました（写真1）。卒業生のうち、10名が大学院に進学しました。また、県内外の民間企業、公務員、教員に就職しました。卒業生の今後のご活躍を祈念しております。

2月におこなわれた課題研究発表会では、今年度から口頭発表のみとなりました。1年間取り組んだ研究成果を9分で発表し、続く3分の間で活発な質疑応答をおこないました（写真2）。

第3タームには、新しく自然環境科学研究演習という科目が開講されました。対話集会での先輩からの要望を受けたもので、3年生が各研究室で実際におこなわれている研究手法を学び研究室を見学・体験する科目となっています。

その他、コロナ禍が落ち着き、いくつかの対面イベントがありました。

8月に開催されたオープンキャンパスでは、Webオンラインとともに久しぶりに対面でもおこなわれました。多くの高校生に会場いただき、それぞれの研究室

の展示やポスターを見て回り、興味深そうに説明を聞いてもらいました。

また、11月におこなわれた同窓会（創環会）では、学科が創設された頃の卒業生が多く集まり、2020年度に瑞宝中級章を受章された増田芳男先生をお祝い致しました。また、2020年度にご退職された久保田喜裕先生と2021年度にご退職された浮田甚郎先生には、在職時の思い出話や近況について、お話しいただきました。

いろいろな活動を通じて、在校生の皆様もたくさんの思い出を作ってください。

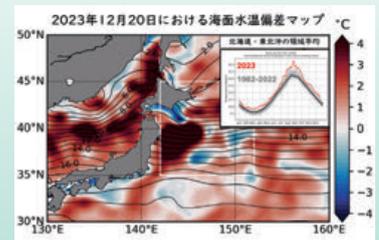


フィールド科学人材育成プログラム

2023年度は、当プログラムでは13名（農学部と合わせて22名）が卒業しました。また接続する大学院フィールド科学コースでは、修士課程修了者18名、初めての博士課程修了者1名を送り出しました。

2024年4月より助教の高橋直也先生が着任されました。高橋先生の専門は、海洋物理学及び大気海洋相互作用です。海面水温の異常な高温状態が数日～数週間、時には数ヶ月以上も続く「海洋熱波」など、海の極端イベントの発現メカニズムやその予測可能性などを大規模データ解析や数値実験によって取り組んでいます。近年頻発する異常気象の発現に関わる海洋の役割の解明が今後期待されます。また6月には石崎智美助教、野口里奈助教が揃って准教授に昇任されました。今後は当プログラムの中核としてますます教育・研究に邁進されていくことを期待します。

2017年度に理農両学部が共同して実施する教育プログラムとして開設し、佐渡自然共生科学センター、災害・復興科学研究所の教員の支援を得て、さらに大学院コースでは人間科学・社会科学系の教員にも参画頂くなど、学内でもユニークで特色ある体制で順調に教育を進めています。21世紀の地球は気候変動に伴う生態系等の環境変化、自然災害の頻発など大きく変化する自然との共生の道を探る必要があり、その中で自然・社会生活環境の再生・活性化に活躍・貢献する人材を世の中に送り出して行きたいと考えています。





カエルと研究生活

生物学プログラム 教授 前野 貢



1986年初めて就いた助手として研究生活は、とても新鮮でしたがとても忙しく過ごしました。当時未知の病原ウイルスを発見することを目指して、昼も夜もなく、実験に没頭しました。それは研究には違いないですが、深く思考して次の一手を考えるような研究ではなく、ひたすらトライアンドエラーの繰り返しの実験でした。少しばかり成果が得られたことを機に、職場の教授に留学を願い出ました。1990年から4年間のポスドク生活は、今振り返ると人生で一番楽しかった研究生活でした。そこで始めたカエルの発生学研究とその分野で出会った研究者のつながりが新潟大学への赴任につながりました。1994年にそれまで縁のなかった新潟に移り住み、最初の1年間は、留学先のアメリカに家族を残しての（逆）単身赴任の生活をしました。今は知る人も少ないと思われるが、中央区上所にあった公務員合同宿舎（通称独身寮）に入居しました。着任最初の年の夏、すぐ近くの信濃川で上がった新潟火花を特等席に近い宿舎の窓から見物したことが印象に残っています。2年目に海岸沿いの合同宿舎に入居すると、そこには様々な学部の諸先生方が住んでおられ、大学についてのいろいろな情報や生活アドバイスをいただく貴重な環境となっていました。今でも当時の宿舎仲間の先生とは同郷意識があり、昔話はずみずみ。少し新潟に慣れてきたころに、郊外の白根市（現在は新潟市南区）に移り住みました。「なぜそんな遠くに？」と何度か聞かれましたが、私や家族にとってはのびのびした生活ができそうな新しい環境に見えました（住んでみると結構不便でした）。

さて実験に使うアフリカツメガエルというカエルですが、学生時代の恩師の研究室から譲っていたが、徐々に増やしながらか、最大で300匹くらいを実験のために常備していました。飼育場所に困り、理学部屋外に設置されていた水槽で飼育していたこともあり（現在の「動物実験等の実施に関する基本指針」ではやってはいけない）。良質な卵を産む元気なカエルに育ちましたが、カラスに狙われることがわかりやめました。2000年ころからは、カエル研究者が新たに同僚となったこともあり、新しく建てられた大学院生命環境棟にカエルの飼育実験室を整備することができ、現在に至っています。カエルとの協働生活でカエルからいろいろなことを学びましたが、カエルへの恩返しとなるような大きな成果には至っておりません。カエルに申し訳ない気持ちでいっぱいです。遺伝子を組換えたカエルを創ったりして、なんてニンゲン本位で高慢なことをしてきたのだらうと思うこともあります。研究生活は道半ばで終わりつつあるのですが、新潟大学で出会った多くの大学生、大学院生と一緒にカエルの発生のしくみについて研究することができ、何にも代えがたい貴重な30年間を過ごすことができたと思っています。慣れない組織運営に携わる機会もありましたが、できの悪い私を様々な場面で助けてくださった多くの方々に深く感謝申し上げます。



多くの方々との出会いに感謝して

地質科学プログラム 教授 豊島 剛志



機会をいただいたので、退職にあたって、私が理学（地質学）を研究するに至った経緯について、お話ししたいと思います。

大学での自分の教育・研究生活は、様々な人々との出会い・関わりによって支えられ育てられて、進めてこられたと思っています。まずは小学生の時です。友人に誘われ、夏休みの自由研究として、縄文土器と約1600万年前の植物化石を集めて、夏休みの自由研究を行い、担任の先生にご指導いただきました。中学生になって、またも友人に誘われ、1973年の日本沈没の映画を見に行きました。この時に、地球のことを知りたい、地球のことを調べなければダメだ！みたいな気持ちが湧き上がったことを覚えています。だからと言って、自分で何かを調べるところまでには至りませんでした。続いて、中学の理科の先生に誘われるまま、物体の落下実験に明け暮れる夏休みを過ごし、理科の楽しさを意識しました。中学生の冬、一緒に学校の雪かきをしていた社会の先生に、高専への進路を相談し、高校進学して大学に行った方が良いと示唆をもらい高校進学へ。高校では物理と地学の先生に大変懇意にさせていただきました。受験大学を決める際も、中学時代に観た日本沈没の影響が強く、地質学か地球物理学を学べる大学が選択肢でした。結果、地元の新潟大学理学部地質鉱物学科に入学することができました。ここでもたくさんの出会いがありました。特に、卒論のテーマとその後の人生を決めた、小松先生と植村先生、故 卯田先生、同級生のO氏（その後、九州大学教授）との出会いがありました。卒論は、北海

道の日高変成帯という地殻深部が地表に現れた地質体の研究でした。ここから、大陸地殻・島弧地殻の成り立ちや性質、そこに現れた過去の地殻変動（大陸衝突・分裂やプレート運動、地震など）の記録を研究することが始まり、ライフワークとなりました。広島大学の博士課程に進学し、そこでも原先生をはじめ、多くの方と巡り合い、理学博士の学位を取得することができました。その後、幸せにも新潟大学大学院生自然科学研究科助手に採用となり、現在に至っています。助手の頃、同年代の大学院助手が複数いたので、現在の管理棟に当時あった図書室に集まりお互いの研究紹介や悩みを話し合っていたことが思い出されます。地質鉱物学科～地質科学プログラムの教育・研究では、卒論生や大学院生とともに、北海道から九州に至る日本各地を研究し、インド・ベトナム・ネパールなど東アジアの研究も行ってきました。インド研究はSatish先生、Sajeev先生との出会いの賜物です。さらに第32次、第39次、第49次、第60次日本南極地域観測隊夏隊として4回の南極調査ができました。本当に幸福でした。

これまでに出会いお世話になった方々に感謝するとともに、理学部教職員、学生・院生の皆様が今後も健康でご活躍されること、理学部がますます発展されることをお祈りします。本当に長い間ありがとうございました。

理学全開!
探究心はとめられない

思い出のロゴ



トリとともに歩く

地質科学プログラム 教授 松岡 篤

最終講義のタイトルを、「トリとともに歩く」とした。何人もの方から、どうしてそのタイトルなのかと尋ねられた。

出身大学で入部したのがワンダーフォーゲル部。日本語に訳すと、渡り鳥とか旅鳥とかとなる。卒論で調査地域として歩いたのは、鳥巢層群の模式地である高知県佐川地域で、植物学者の牧野富太郎の出生地である。指導学生ではなく、自分自身の地質調査地域として一番長く歩いたのは四国西部で、新潟大学に赴任した1987年に開始し、10年かけて地質図を完成させた。私は調査に自家用車を使わないので、広い地域を文字通りよく歩いた。その成果として、鳥越背斜とか鳥坂（とさか）地窓という地質名称を提案した。

コロナ禍になる少し前に、自転車通勤から徒歩通勤に変えた。歩くのは寺尾西の自宅から生命環境棟の研究室までの往路なのだが、歩くと植物の成長を感じ、少しずつ変わりゆく街のようすに気づくようになる。コロナの時期に入り、学生たちが大学に立ち入ることが制限され、キャンパスに入ることができなくなった。2020年度は理学部の学務委員長を務めていたこともあり、とくに新入生にキャンパスのようすを紹介したいとの思いから、五十嵐キャンパスの野鳥の動画を撮り始めた。これに合わせて徒歩通勤の際に出会う鳥についても記録をつけるようになり、4年が過ぎようとしている。五十嵐キャンパス内で見られる鳥の動画は、サイエンスミュージアムのYouTubeにアップされている。

私は1987年6月1日の赴任なので、新潟大学には36年と10ヶ月お世話になった。最初の7年10ヶ月

月間は教養部に在籍し、その後理学部に移籍した。理学部や大学院自然科学研究科だけではなく、国際交流、地域連携、社会教育などの活動を通じて、学内の多くの部署の方々にお世話になった。教職員サッカーチームの練習では、多様な部局の人たちとプレーを楽しんだ。この機会に、新潟大学で出会えた多くの方々に、心からのお礼を述べたい。

37年近くも大学にいるといろいろなものが変化する。赴任した頃は、1年間の講義で4単位を出していた。学期制になり、半期2単位が基本になった。その後ターム制が導入され、1ターム1単位が始まった。理学部校舎のA棟エレベータ脇にはタバコの自動販売機があった。その近くには公衆電話があった。かつて、公衆電話は五十嵐キャンパスのほぼすべての建物にあった。最近、総合教育研究棟のD棟2階入り口にあったものがなくなった。教育学部にあったものは、建物改修とともに消えた。建物内の公衆電話は絶滅した。

季節毎に鳥の種類が変化する。その年に初めて接する事象は気づきやすい。初めてツバメを見たとか、ウグイスの声を聞いたとかは印象に残る。最後がいつだったのかは、よほど意識していないと気づかない。



キャンパス内の雪の上で凍えていたメジロを救出（2023年1月24日）

生物学プログラム 助教 神林 千晶

2024年4月より、生物学プログラム（主担当）および自然環境科学プログラム（副担当）の助教として着任しました、神林千晶（かんばやしちあき）です。私は動物の多様性と進化に興味をもって研究をしています。主な対象は爬虫類と両生類、そして「ヒル」です。ヒルは吸血動物としてご存じの方も多いかと思いますが、実は日本に生息する約70種のうち、人間から血を吸うヒルはほんの数種です。それ以外の、特に小型の種は人の目に触れることも少なく、戦前から研究が進んでいない状況にあります。興味深い進化を遂げた種が多数見られる一方、研究の基盤となる分類にも多くの問題を抱えていますので、古典的および先進的な手法を統合して、分類の整理から進化メカニズムの解明まで研究を展開していきたいと考えています。

私はもともと地元の生まれで、高校までを新潟市で過ごしました。その後は広島の大学に進学し、滋賀、京都での研究生生活を

経て、縁あって10年ぶりに新潟へ戻ってくることになりました。思えば、私が研究の道に進んだのは幼少期から地元の生き物に触れてきたことがきっかけです。その豊かな自然をはじめ、これまで気付かなかった新潟の魅力を見つけていくのも大変楽しみです。駆け出しの若輩者ではありますが、これから研究や教育を通して科学、大学、地域の発展に寄与できるよう励みたいと思っています。どうぞよろしくお願いたします。



フィールド科学人材育成プログラム 助教 高橋 直也

2024年4月1日付でフィールド科学人材育成プログラムの助教として着任しました高橋直也（たかはしなおや）と申します。岩手県軽米町に生まれ、学生時代を宮城県仙台市で過ごし、ポスドクとしてアメリカ・ハワイで過ごした後、新潟にやって参りました。約4年振りの日本での生活は懐かしくもあり新鮮で、人生初の日本海側での生活にも徐々に慣れてきました。噂に聞く日本海側の厳しい冬のお天気事情に既に不安は感じておりますが、今のところ天気にも恵まれる機会も多く、美しい草花や風景を楽しんでいる今日この頃です。

私の専門分野は、大気海洋物理学です。大気海洋で生じる様々な現象を物理的手法を用いて理解することを大きな目的としています。学生時代は海上での雲形成過程、ポスドク時代は海面の異常高温化で特徴づけられる海洋熱波の形成過程に関する研究を行ってきました。最近関心を持っている研究対象は、豪雨・豪雪・熱波などを含む「極端現象（異常気象）」です。我々の日常

生活に深刻な被害を及ぼすことが広く知られており、一昔前と比べると肌で実感する機会が増えてきた現象ですが、生成消滅メカニズムや予測可能性などの詳細は未だ謎に包まれている部分が多いです。そこで、観測データ解析や領域気象海洋モデルを用いた数値実験を通して、謎の解明に取り組んでいます。これからは、研究活動だけでなく教育活動にも全力で取り組み、理学部フィールド科学人材育成プログラムに貢献できるよう尽力していく所存です。今後とも、どうぞよろしくお願いたします。





科学人材育成事業について

新潟ジュニアドクター育成塾は、新潟県の小中学生の科学の芽を育てることを目標に、2019年度にスタートしました。2023年度（昨年度）には、40名のマスタープログラム受講生と9名のドクタープログラム受講生が、新潟県の特徴を活かした教育プログラムや課題研究に取り組みました。佐渡研修では、新潟大学佐渡自然共生科学センター教員の指導により、1日目に海沿いの風光明媚な歌見棚田を訪問し、宿泊先では「農家の担い手不足」をテーマにグループディスカッションを行い、2日目にビオトープにおける動物採集と観察を行うことで、「自然と人の共生」に対する学びを深めました。また12月には、五十嵐キャンパスの中央図書館ライブラリー



佐渡研修のグループディスカッションの様子

目には、五十嵐キャンパスの中央図書館ライブラリー

ホールとラウンジを会場に、両プログラムの受講生が一堂に会する成果発表会を開催し、保護者の参観のもと盛況のうちに、約6ヶ月にわたる学びを締め括りました。

新潟ジュニアドクター育成塾は、2019～2023年度の5か年計画をもって、その役割を終えましたが、2024年度からは、公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の「次世代系人材育成プログラム助成」による中学生対象の教育プログラム、及び国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の「次世代科学技術チャレンジプログラム」助成による高校生対象の教育プログラムを同時に展開していくことで、引き続き、新潟県の教育界ひいては地域社会に貢献して参ります。



中間発表会で講演するドクタープログラム受講生



教員の受賞・表彰

関川 浩永 名誉教授（元理学部数学科教授）が瑞宝中綬章を受章されました。

数学プログラム 星 明考 教授が「新潟大学学術出版奨励賞」を受賞しました。

新潟大学学術出版奨励賞は、研究者の研究意欲を高め、本学の研究活動の活性化に寄与するとともに研究成果の社会への発信力を強化するため、研究者が刊行した優れた学術図書を顕彰し研究費を支援するものです。

数学プログラム 三浦 毅 教授、橋詰 健太 助教（2件）が「新潟大学優秀論文表彰」を受けました。

新潟大学優秀論文表彰は、本学研究者の研究意欲向上を図り、新潟大学の研究成果の国際発信力を高めるため、国際的に評価の高い学術誌に論文を掲載した研究者を顕彰し研究費を支援するものです。

フィールド科学人材育成プログラム 奈良間 千之 教授が、令和5年度新潟大学学長教育賞を受賞（共同受賞）されました。

新潟大学学長教育賞は、本学の教育戦略の推進に資する課題に取り組む教員集団に対する新たな褒賞制度「学長教育助成制度」を受けた中で、特に顕著な功績があったと認められる取組を実施した教員集団に対して授与されるものです。

<p>※変更になることがあります。</p>	10月2日	第2学期授業開始	1月18日～19日	大学入学共通テスト
	10月12日	理学部総合型選抜	2月25日～26日	一般選抜（前期日程）
	10月	新潟大学Week 地質まつり、サイエンスミュージアム特別開放ほか(未定)	3月11日～31日	春期休業
	10月	大学祭	3月12日	一般選抜（後期日程）
	11月16日	理学部学校推薦型選抜	3月24日	卒業式・卒業祝賀会
	12月27日～1月6日	冬期休業	4月	入学式
			4月	第1学期授業開始

お問い合わせ
窓口のご案内

〒950-2181 新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部学務係

TEL : 025-262-6106
FAX : 025-262-6354
Mail : gakumu@ad.sc.niigata-u.ac.jp

リサイクル適性

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。